

■ 出発点の再確認

何年経てば、「過去」は「歴史」と呼ばれるようになるのだろうか？ 以前この連載でも、ある市民向けのセミナーで、高校で使われる歴史教科書の最後の 1 頁に近年のできごとを書き足すという作業をしてもらった話を紹介したことがあったが、そのことにも関連している話である。

例えば 1955（昭和 30）年に刊行された遠山茂樹・今井清一・藤原彰による『昭和史』。昭和はこの本の刊行からさらに 30 年以上続いたので、現在の私たちからすれば、占領期までを描く「昭和前半史」というところだが、当時そのことは問題ではなかった。未曾有の悲劇を伴う戦争が「終わった」、敗戦と占領期の改革によって社会・政治体制が「変わった」という実感があり、執筆者たちは、10 年程度前までの過去を「歴史」としてみなさなければならぬ・みなすことができると考えていたのである。

『昭和史』は、多くの読者に恵まれてベストセラーになった。今では珍しい、文学者と歴史家との論争もあった本である。ある時代が「終わった」「変わった」という実感だけでなく、それを元に「戦後」という現在を知り、それをさらに未来に向けて創ってゆくという意識が執筆者や読者に共有されていた。

もちろん昭和 30 年はアジア太平洋戦争が終わって 10 年で、占領期も終わっている。戦時中には情報統制があり、一般の人々には戦争に関する事実の多くが知らされていなかった。また、占領期における東京裁判の審理や GHQ の情報提供によるラジオ番組「真相はかうだ」は、あるやり方でその空白を埋める役割を果たしたが（その評価についてはここでは措いておく）、そこから自由になるために、『昭和史』は、日本人自身による歴史的な説明として求められていたということであろう。

時代の変化に対する観察があり、その説明の要求は、未来を創ろうという意志と結びついていた。その知的な拠点として、「歴史」が求められたということである。元号として終わっていない、たった 10 年前までのことが「歴史」になったのである！ 日本において「現代史」もしくは「同時代史」が誕生した瞬間だといえるだろう。

一方、「平成史」も同様に書くことはできるだろうか。その記述は、どのような問題意識に支えられているのだろうか。これもいずれ論じることにはしたい。が、ともあれ、「現代」や「現在」、「同時代」を歴史の対象とみなす「現代史」や「同時代史」は、直接に過去と未来をつなぐ「歴史」である。（もちろん例えば「鎌倉時代」を想像することも、現在そして未来を考えることに繋がるはずだが、その力は直接的なものではない）

そうした「現代史」「同時代史」とは、間違いなく過去ではあるけれども、遠い「歴史」ではなく、自らの経験と地続きで、ついこのあいだのことのようでもある過去である。その色彩は、どのような未来を描こうとするかによって変わってくる。

そこでは、客観的で理知的な説明と、体に刻み込まれた個人的な経験や実感とがない交ぜになる。だから「現代史」「同時代史」の試みは、科学的であろうとする歴史研究にとって、危険の多い冒険になる。

まずなによりも、一つのできごとや現象の影響がまだ「終わって」おらず、何か事態のただ中にあるという可能性があり、歴史として見ることを困難にさせているということがある。過去というのは、ある程度時間的距離を取ってみることで、見え方が安定してくるところがあるからだ。危険だというのは第一にそういう意味である。

また、「確からしさ」の基準というのものもある。鎌倉時代や江戸時代といった遠い過去であれば、歴史資料という証拠を読みこなすことのできる歴史家のいうことに一般の人々が異論を差し挟む余地がない。けれども「現代史」「同時代史」というのは、歴史家だけが独占している過去ではなく、一般の人々もまた「生き証人」である過去なのである。「証人」である一般の人々が、歴史家の描く「現代史」「同時代史」に異論を唱えたらどうなるのか？ 証拠や証人・証言に関わる「確からしさ」をめぐる、歴史家という専門家に独占されない「現代史」「同時代史」は、やはり独特の「歴史」であるといえる。

確実に言えるのは、「現代史」「同時代史」という「冒険」がもたらす知的な可能性は計り知れないということだ。すでに連載でも述べたように、「現代史」「同時代史」を作り上げてゆこうとすることで、この世界（社会）がこうなっているという合理的な理由を知りつつ、それが変えられないものではないと信じることもできるようになる。更にいえば、時間軸のなかで考える「他者」との繋がりや、自分がかくあることの来歴と未来に託すものを考えることができるようになる。

ただ私たちのいる現在、平成 20 年代末=2010 年代後半という時代、「戦争」だとか「革命」だとかいう「明確な変化」は起こりそうもない。巨大な変化に対する実感と希望に満ちた未来への参照によって「歴史」を呼び起こすということは、いま現在できなさそうである。

これを冷戦後の「歴史の終わり」による「中世的停滞」などと呼ぶと少しオーバーかもしれないが、全てを一変してくれる契機もあまり想像できない。巨大な法則によって動かしようもなく歴史が支配されていると考えられていた時代にあっては、「現代史」「同時代史」は、「法則」がその姿形をみせる最前線であった。『昭和史』もその見地から描かれていたといえる。

「終わりになき日常」に対する地道で弛^{ゆる}みなき改良の意志が、社会を少しずつ変えてゆくような時代に、私たちはいる。

歴史法則への信頼は喪われ、変化の実感にも乏しい時代。それでいて「歴史認識」は巨大な社会問題となっている。そして「歴史を直視せよ」という人々がいる。が、そこでの「歴史」はそれぞれの政治的立場によって全く違うものとなっており、お互い生産的な論争をすることすら不可能だったりする。また一方で、歴史のポピュラーカルチャー化と

いかサブカル化というか、本当に「自由な」歴史が社会で商品化されて流通していたりする。

そういった時代にあって、どのように「歴史」とつきあってゆけばよいのだろうか。単なる年表作りや、多少気の利いた時代の趨勢への解説やそれへの命名によって「現代史」「同時代史」が求められているわけではないだろう。この連載が目指してきたのは、「現代史」「同時代史」を認識するための「基礎体力」を鍛えてゆこうということである。

その拠点が「実感」や「経験」であり、そこから出発しながら、それを「歴史」との関係で調節してゆくということだった。歴史研究の科学的な手続きは軽視されるべきではないが、それと「実感」や「経験」を結びつけ、理解をより深く・立体的にすること。これはいかにして可能だろうか。

いろいろと提案をしてきた。「子供連れ大人向け映画」「奴隷に対する感度」「自然史的時間との対比」「現代の神話」「歴史と謝罪（ただし個人）」「保守／革新のリハビリテーション」…。提案できることがまだまだあるのではないか、それを考え続けている。もう少しおつきあいいただきたい。